

Title	東京大空襲の記憶の継承に関する社会学的研究
Sub Title	
Author	木村, 豊(Kimura, Yutaka)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.70 (2010. ) ,p.141- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成21年度博士学課程生研究支援プログラム研究成課報告書
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000070-0141">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000070-0141</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 平成21年度 博士学課程生研究支援プログラム 研究成課報告書

## 東京大空襲の記憶の継承に関する社会学的研究

木 村 豊

### 1. はじめに

戦後65年目を迎え、戦争を経験した世代の高齢化とともに、戦争の記憶の風化／継承といった問題が、いよいよ深刻化している。

それは、現在、戦争を経験した世代によって戦争の記憶を表象することができる最終的な時期にあり、近い将来、そうした人びとによって戦争の記憶を表象することができなくなることへの危惧を意味している。と同時にそれは、戦争の記憶を表象する活動主体が戦争を経験していない世代へと移り変わろうとしていることへの危惧をも意味している。つまり、戦争を経験した／経験していない世代という二つの世代間には大きな断絶が存在し、そうした断絶をめぐって戦争の記憶を継承することの問題が生じてきたといえる。

それでは、戦争を経験した世代から、戦争を経験していない世代へと、戦争の記憶を継承するとは、いかなることなのだろうか。そもそも、そのようなことは可能なのだろうか。

この課題を検討するため、本研究では、東京大空襲の記憶について取り上げる。

東京大空襲とは、第二次世界大戦中（1945年3月10日）、米軍によって行われた大規模絨毯爆撃であり、東京下町の人口密集地に対し、集中的に83万発、1665トンの焼夷弾を投下し、大火災を発生させた。それによって焼失した家屋27万戸あまり、死者推定10万人以上、負傷者40万人、家を失った被災者は100万人にのぼった、とされている（荒井 2008）。

それでは、現在、東京大空襲は、誰によって、いかに、想起されているのだろうか。そうした問いを持って、本年度は、まず、東京大空襲の当事者に対して、次の2点においてアプローチを試みた。

まず、第一に、東京大空襲の犠牲者・死者の氏名を記録する市民運動を取り上げ、運動の担い手へのインタビュー調査と、運動に参加した遺族の『声』（運動の中で編纂した冊子）の分析から、その市民運動の中で、東京大空襲が、いかに想起され、いかに語られているのか、について検討した。それから、第二に、その運動に参加した東京大空襲を経験したある一つの家族へのインタビュー調査から、その家族の中で、東京大空襲が、いかに想起され、いかに語られているのか、について検討した。

そうして、以上2点から、東京大空襲の当事者によって、東京大空襲が、いかに想起され、いかに語られているのか、について考察した。

### 2. 市民運動の中の東京大空襲

まず、東京大空襲の犠牲者・死者の氏名を記録する市民運動（以下、氏名記録運動とする。）を取り

上げ、運動の担い手へのインタビュー調査と、運動に参加した遺族の『声』（運動の中で編纂した冊子）の分析から、その市民運動の中で、東京大空襲が、いかに想起され、いかに語られているのか、について検討した。

氏名記録運動の中では、東京大空襲の犠牲者・死者について想起する／語る二つの立場がある。

ひとつは、東京大空襲によって家族を亡くした遺族という立場であり、氏名記録運動では、そうした立場から、空襲で行方不明となった家族の遺体や遺骨を「見るができなかった」ことが語られている。また、もうひとつは、東京大空襲を直接体験した体験者という立場であり、氏名記録運動では、そうした立場から、空襲体験の中で大量の遺体を「見た」ことが語られている。

氏名記録運動には、そうした二つの立場が共存する場を可能にしているものがある。それは、「遺骨もなく、生きた証に、せめて名前だけでも」というモデルストーリーである。

氏名記録運動の中では、このモデルストーリーを通して、遺族・体験者という立場と、東京大空襲の犠牲者・死者との関係性が語られている。ただ、二つの立場によってこのモデルストーリーが表わすものは異なっている。

それは、まず、遺族にとって、東京大空襲で亡くなった家族の遺体や遺骨を「見るができなかった」ということは、家族の中で身近な人の死を見る／認めるという死者と遺族との関係性において不十分なものであった。また、体験者にとって、東京大空襲の犠牲者・死者を示す正確な記録がないということは、自分が、東京大空襲の中で偶然生き残り、大量の遺体を確かに「見た」という関係性において不十分なものであった。そのような二つの立場によって異なる不十分さを、このモデルストーリーは表している。

したがって、モデルストーリーを通して語られるそうした不十分さの訴えは、氏名の記録へと向かう原動力となっている。つまり、東京大空襲の犠牲者・死者の氏名を記録することは、それらの不十分さを補おうとするものであるといえる。

### 3. 家族の中の東京大空襲

次に、氏名記録運動に参加した東京大空襲を経験したある一つの家族へのインタビュー調査を行い、その家族の中で、東京大空襲が、いかに想起され、いかに語られているのか、について検討した。

戦争の経験を聞き取ろうとするとき、家族に焦点があてられることは少ない。

それでも、東京大空襲は、生活空間が被災の場となった大規模な絨毯爆撃であるため、家族で大空襲の中を逃げ回ったという体験者が多く、また、大空襲によって家族を亡くしたという戦災遺族も多く存在する。したがって、東京大空襲において家族は重要な経験の基盤となっていると考えられる。

そこで、東京大空襲を体験し、東京大空襲によって戦災遺族となった、ある一つの家族の各人に対して、ライフヒストリーの聞き取り調査を行い、そうして語られた家族の各人のライフヒストリーにおける東京大空襲の経験を重ね合わせていくことで、その家族の中で、東京大空襲が、いかに想起され、いかに語られているのか、について検討した。

東京大空襲を経験した家族の中では、東京大空襲の経験を想起する／語る各々の立場がある。

それは、体験者／遺族という東京大空襲に対する二つ関わり方（当事者性）の重なりの中で、また、ライフヒストリーにおける東京大空襲経験の位置づけの中で、そして、家族関係の中で、家族の各人によって東京大空襲の経験を語る立場がつけられており、そうした立場から各々の東京大空襲の経験が語

られている。

ただ、そうした家族の各人によって各々の立場から語られる東京大空襲の経験は、語りがそれぞれ単独で完結するものでもない。それは、家族の中でお互いに補完するように語られているといえる。つまり、家族の中で、各々の立場から東京大空襲の経験が語られるとき、そこでは、家族における東京大空襲経験の物語と、そうした経験の物語を語る各々の役割が、家族の各人によって意識されている。

したがって、家族の各人によって語られる東京大空襲の経験は、一方では、家族の中で共通の語り、共通の意味づけがなされており、それは家族の中で「共通」のものでありながら、その一方では、各人によって、異なる語り、異なる意味づけがなされており、それは各人にとって「固有」なものである、ただ、そうした家族の各人の「固有」な経験は、それぞれ単独で存在するのではなく、家族における東京大空襲経験の物語の中に位置づけられている。

よって、そうして語られる家族の東京大空襲の記憶は、平板的な共通の記憶／イメージとしての集合的記憶ではなく、また、完全な個人的記憶でもない、それは家族の中で、より重層的な集合的記憶／想起のかたち、をなしているといえる。

#### 4. まとめにかえて

以上二つの調査から、ここまで、東京大空襲の当事者によって、東京大空襲が、いかに想起され、いかに語られているのか、その一端を見てきた。

そこでは、「炎の中を逃げ回る」というような空襲に対する一般的なイメージや「せめて名前だけでも」というような運動におけるモデルストーリーとの関係性の中で、東京大空襲と一緒に経験した人びととの関係性の中で、体験者／遺族という東京大空襲に対する二つ関わり方（当事者性）の重なりの中で、ライフヒストリーにおける東京大空襲経験の位置づけの中で、東京大空襲を想起する／語る各々の立場が作られており、そうした立場から想起される／語られる東京大空襲の記憶の一端を見ることができた。

また、そうした結果から、本研究では、今後、次なる課題へと進むことができる。

それは、戦争を経験していない世代（非当事者）は、戦争の体験／記憶／経験と、いかに対峙することができるのか、また、それはいかなる立場なのか、という課題である。したがって、次年度は、戦争を経験していない世代（非当事者）へのアプローチを進める予定である。

#### 付記

本稿の、2. 市民運動の中の東京大空襲、3. 家族の中の東京大空襲、で示した内容は、それぞれ本年度に論文投稿「空襲の犠牲者・死者を想起する—「せめて名前だけでも」という語りを通して」『人間と社会の探究 慶應義塾大学社会学研究科紀要』、慶應義塾大学大学院社会学研究科、69号、2010年、及び、学会報告「家族における東京大空襲の記憶と語り」（日本社会学会第82回大会一般報告、立教大学、10月・2009年）（現在その報告で配付した原稿を加筆修正したものを論文として投稿中である。）を行ったものの要約である。

#### 主要参考文献・資料

荒井信一、2008、『空爆の歴史—終わらない大量虐殺』岩波書店

- 星野ひろし, 2001, 「東京空襲・記録運動の現在」『歴史評論』(616) pp. 63-68  
 小関隆, 1997, 「コメモレイションの文化史のために」『記憶のかたち—コメモレイションの文化史』柏書房  
 ビエール・ノラ／谷川稔訳, 2002, 「記憶の場—フランス国民意識の文化=社会史」岩波書店  
 東京空襲を記録する会, 1975, 『東京大空襲・戦災誌 第1-5巻』講談社  
 山本唯人, 2005, 「「分断の政治」を超えて—東京大空襲・慰霊堂・靖国」『現代思想』33(9) pp. 199-209  
 東京空襲犠牲者遺族会会報『せめて名前だけでも』(2001年-2009年)

## 戦後日本社会と原爆被害者の生活世界に関する社会学的考察

八 木 良 広

### 1. はじめに

本報告では、まず本節において筆者の研究目的とその背景、研究方法、特色と意義などについて概観し、次に2において、2009年の研究成果として掲載論文と学会発表の内容について述べる。そして最後に3で今後の課題について触れたい。

筆者の研究課題は、原爆被害者（以下、被爆者）と原水爆禁止運動、平和運動といった彼／女らを取り巻く政治的社会的状況に関する調査研究を通して、第二次世界大戦を生き延びた経験者が戦後日本社会のなかでどのような問題に直面しそれに対処し、生きてきたのかを明らかにすることである。戦争体験には、兵士の戦争体験や銃後の体験、特攻隊員の体験、被爆体験など複数種類あるが、筆者は被爆体験に焦点を当てている。戦後、特に冷戦期に他の体験以上に社会の中核に位置付けられてきたのが被爆体験であり（野上 2008）、それが戦争の認識をめぐる主要な問題点をその時々如実に浮き彫りにしてきたからである。マスメディア上で頻繁に象徴的に表現される「唯一の被爆国」という誤った言説は、被爆体験が単に個人が抱えるものというよりもむしろ、(戦後規定された)「日本人」一般が主に国外の人々に向けて意識的に保持することができるナショナリスティックな特権であることを示している。事実それは「日本人」にとって核兵器廃絶を説得的に唱えることを可能とする後ろ盾であった。しかし、冷戦期日米安全保障条約に基づき政治的、軍事的、経済的に依存してきた日本国のその態度は相対する相手により異なり、勿論核戦争の勃発や戦争を含む様々な暴力の抑止に大きく貢献したが、米国や西側諸国のヘゲモニーに加担しているという意味で歪んだものだった（藤原 2001）（米山 2004）。

冷戦期の国際関係のなかで日本の立場が決定づけられていく中で、日本社会は固定的な被爆者イメージを作り出してきた。被爆者の生きざまについての物語は主に被爆前後に本人が見聞きした出来事によって構成され、被爆者は心身ともに苦悩を抱えその日暮しを強いられるが最終的に原水爆禁止運動や平和運動などとの出会いにより核兵器廃絶への思いを生きる活力として保持するようになる、といった内容である。そして原爆死没者に対して自分は未だ生きていることに後ろめたさを感じ被爆者は「生かされている」と語る。その独特な響きをもつ生の表象は戦後の社会の中でマスメディア上で繰り返し生成・参照されて、結果被爆者の生きざまを示す代表的な指標となっていった。しかし、その表象から戦後日本社会のその時々政治的社会的状況を推し量ることはほとんど不可能であり、それは社会と切り離された個人の生を示すものにすぎなくなっている。個人史から社会史を適切にまなぐすことの不可能